

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

朝5時25分、信越放送「あさチャン」の夏目三久メインキャスター「朝早くからご覧いただき有難うございます」の挨拶、朝一番で褒めてくれたかのよ

うな言葉が何故か心を温める。言葉が持つ魅力を感じる時だ。山形新聞のコラム談話室で、アイヌ民族に語り継がれた天地創造物語の中で、天上界の神々は人間社会が常に平和でなくてはならないと考え、それを実現するため人間に最高の宝物を授けた。それが言葉だと示した。

急激な社会変化に対応する心構えを意識する事が大切だ

だが毎日悲惨な事件や、いつ戦争が勃発しても不思議でない国際情勢が報道されている。河合雅司さんの著書「未来の年表2」で人口減少日本の未来予想が描かれている。幾度か読み直すと背

筋が寒くなる厳しさを感してしまふ。だが年末始めに多くの新聞に目を通すが、今年ほど今後の動向について厳しく報道していないと感じてしまふ。

12月中旬、私が暮らす森上地区で、「ゆっ

関心のあった白馬村内の無電柱化の話が心に残った。全国で1年間増加する電柱の増設に、歯止めを骨子にした無電柱化推進法が昨年成立、景観形成の観点から多くの地域住民の妨げになる事、9月の台風21号では1600本以上が倒れた。無電柱化の進まない大きな要因はコスト、現場の状況にもよるが、地中化の費用は電柱設置の10倍以上と分析、だが相次ぐ災害を考えれば、地道に地中化を進める必要があると、コラムで伝えた。ヨーロッパに

が願った事業がどの様に推移して行くのか興味があったからだ。上毛新聞のコラム三山春秋で日本にある電柱の総本数が3578万本、地震などの災害時に倒れたり、道をふさいで緊急輸送や避難



66歳は働き盛り、と思わせる情熱が、明日への地域づくりに期待を抱かせる

事業は、既に着手との明るい話題だった。将来の地域を作り出すのは、住民自らが真剣に地域を考える事ではな

いだろうか。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)